

境界をめぐる—ズヴェーヴォとピランデッロ、ふたつの視点から

発表者：高田和広（東京外国語大学博士後期課程）

イタリア成立から20世紀前半にかけての大きな転換期に、トリエステの帰属をめぐる政治的緊張の只中で、あるいはシチリアと半島との交通から、「境界」という主題にむけて言葉を紡ぎだしたふたりの作家、イタロ・ズヴェーヴォ、そしてルイジ・ピランデッロ。混沌からの秩序創出のために引かれた一本の溝、内と外とを分かちつつ結びつけるこの忌まわしくも神聖なる境界をめぐる、かれらの想像力は神話的な基層にまで遡り、そこから、「原罪」（と「罪責感」）を核にした宗教儀礼や祝祭といった人間集団の新陳代謝をつかさどる律動が生み出されていったこと、そして宗教がそうした集団形成を媒介する役割を果たしえなくなった近代文明においては、境界が禁止と隔離・抑圧の論理へとすり替えられることを明らかにする。では、「媒介形式」を喪った時代において、「個」に分断され、内面の無意識という領域に「病い」を抱え込み、「神経症」に陥った都市に生きる群集（<作者>を探す登場人物たち）を互いにむすびつける紐帯となり、「治癒」をもたらすものは何か？ファシズムの到来を前に、精神分析、そして映画を経由して展開されるふたりの作家の思考を辿りなおす。

イタロ・ズヴェーヴォ（1861-1928）

本名 Aron Hector Schmitz。オーストリア・ハンガリー帝国下のトリエステでユダヤ人の家系に生まれ、トリエステ方言に加えてドイツ語を日常の言語として操るも、作家としてはイタリア語を自己表現の手段に択びとる。1907年にはトリエステに移り住んだジェイムズ・ジョイスと出会い、その激励もあり、1923年に最後の長編『ゼーノの意識』を出版。長編としてはその他に『ある人生』（1892）、『古い』（1898）の二篇を執筆。

ルイジ・ピランデッロ（1867-1936）

イタリア成立にともない南端の一辺境となったシチリアのアグリジェントに生まれる。1892年にローマに渡ってからは、時折の帰郷を除いて、古代の廃墟と近代文明とが混在する都市を終の住み処とし、散文、戯曲ともに膨大な作品群を生み出す。『故マッティーア・パスカル』（1904）、『撮影技師セラフィノ・グッビオの手記』（1925）、『一人は誰でもなく、また十万人』（1926）をはじめとする長編小説に加え、<一年のための短編集>と題して250篇以上の短編を執筆。戯曲では、ローマ進軍の前年に初演が行われた『作者を探す六人の登場人物』（1921）をはじめ、『ヘンリー四世』（1922）、『今宵は即興で』（1930）、『取り替え子の寓話』（1934）、そして『山の巨人たち』（1936）を含む晩年の神話劇三部作など、数多くの作品を残す。1925年、ファシスト知識人宣言に署名する。